

イスパニア会会報

目次

会長挨拶	西川 喬
恩師の先生から	宮本 正美
現在のイスパニア学科	成田 瑞穂
鼓直先生叙勲祝賀会	西川 喬
海外生活	吉田 尤彦
海外便り	永富 靖代
同期会便り	伊藤 明
学術活動	田尻 陽一
在校生と中南米駐在経験卒業生との交流会	谷 善三
卒業してから	谷口 里沙
学生からの留学記	押部 大空
語劇祭	会報編集委員会
編集委員会活動報告	田岡 敬造
近況報告	16名
理事名簿	イスパニア会理事会
原稿執筆要項	会報編集委員会
編集後記	伊藤かお里

会長挨拶

西川 喬

1969年（昭和44年）卒

神戸市外国語大学イスパニア会が発足して今年で14年になる。あながち短いとは言えない年月を経て、去年初めて会報を出すことができた。イスパニア会は、それまでの間、総会や記念パーティ開催を除けば、会報発行はおろか同窓会らしいことはあまりしてこなかった。いや、出来なかったというべきだろう。その理由は、理事の方々がまだ多忙をきわめる現役であり、時間に余裕のある人がいなかったためである。本学のイスパニア学科は昭和37年（1962年）に設立されたもので、他の語学科と比べてまだ「若く」、退職された卒業生がまだそれほど多くないため、この同窓会活動になかなか積極的に参加いただけなかった。最近になって、時間に余裕がある方やこうした活動に興味を持つ方に積極的に参加していただけるようになった。こうして、会報発行は、1号に続いて、2号の発刊にまでこぎつけることができた。

本学の歴史を見ると、昭和40年（1965年）に、イスパニア学科は4年生までの全学年の学生がそろったことになる。私はその年に1年生として入学した。今はそんな儀式めいた事もなくなったが、当時はそれぞれの新入生が入学宣誓書なるものに署名をするため図書館の最上階にあった大教室に集められた。朝の光が差しこむ中、毛筆で自分の名前を書きこんだことをよく覚えている。当時の先生方は、高橋正武先生、林一郎先生、鼓直先生、ペニユエラ先生が専任の先生として教えておられた。2年生のときに木村榮一先生が新たに教授陣に加わり、3年生のときに一色忠良先生が教えられることになった。私は卒業後、大学院に行くことになり、先生方にはさらに教えを受けることができた。その後、母校で教えることになり、それからずっと先生方の薫陶を受けることができたのだから、研究者として実に幸運な環境で仕事を続けることができたと言える。

昭和61年（1986年）に神戸市外大は、六甲から現在の学園都市に移転するのだが、新しい学舎は当時最新の設備が備え付けられた、洒落た感じのもので、戦前から使われていた六甲の古い学舎とは比べ物にならないくらい立派なものだった。それでも、六甲の学舎で学んだ卒業生たちは、新しい校舎を見てもさほど感激せず、あの神戸港を一望できる六甲が良かったというのだから、人の学生時代の思い出はやはり自分の青春時代に深く根付いているのかもしれない。

移転後しばらくして、新学舎で先生のための「パソコン講習会」なるものが開催された。新しいパソコンが導入されたので、パソコンで日本語が打てる「一太郎」というソフトを使っての講習だった。30名ほどの先生が集まっただろうか、講師の方が、こうすればローマ字が漢字交じりの日本語に変換されます、と実際に見せてくれたときは、歓声が上がったほどである。1986年当時の「最新鋭」のパソコンは、そんな状態だったし、使う側の意識もローマ字が日本語に変わっただけで驚嘆の溜息をもらすものだった。それからの進歩がすごかった。スペイン語が打てる、日本語とスペイン語を混在させて書ける、本一冊ほどの分量を保存できる、音楽が聴ける、やがてインターネットが導入され、メールが打てる、などなど、現代のパソコンの使用につながっていく。今はこんなことは簡単にできるのだね、と改めて自分に確認してみたいくなる。

ときどき、自分の学生時代を振り返ってみる。卒業論文は手書きだった。下宿には、電気製品と呼べるものはラジオくらいなものだったか。いや、テープレコーダーはあったかしら。本と机と布団、あの当時の下宿生なら、みんな基本的にはそんな質素な生活だった。

時が移り、滞在していたスペインの大学の研究室で、私のゼミの学生たちとメールのやり取りしたことがある。スペインの他の都市や中南米のいくつかの国、さらにはアメリカやオーストラリアに留学していた学生たちから、そして日本にいる学生たちからも、ほぼ同時にメールを受け取ったことがある。地球儀を頭に思い描きながら、世界はつながっているのだと実感させられた。

さて、イスパニア会の1号と2号の会報作成は、原稿の依頼、受け取り、編集など、写真のやり取りも含めて、ほとんどがメールで行われた。原稿とはペンで書くもの、人とやり取りをするのは手紙でするものと思っていた学生時代とは、まさに、隔世の感がある。

神戸市外国語大学の卒業生は、世界で活躍している方が多い。今はそうした人たちとネットを使えば、簡単にやりとりができるようになっている。しかし、だからといって、面識もない人にいきなりメールを送りつけることは難しいだろう。このイスパニア会が、会報を通して、同じ大学の同じ学科を卒業した人たちの交流に役立つことを切に願っている。

恩師の先生から

近況報告

宮本 正美
(在職 1989 年～2013 年)

神戸市外大で24年間みなさんといっしょにスペイン語を学んできました。みなさんにスペイン語について説明しながら、質問に答えたり、作文の添削を考えたりしながら、たくさんのことを学びました。ありがとうございます。

イスパニア学科主催で年に2、3回は講演会も行なわれています。この10月には、福嶋先生のご友人であり師のお一人でもあるスペイン王立アカデミー会員の Ignacio Bosque 先生と、奥様であり音声学の研究者である Juana Gil 博士を、阪大で行なわれた日本イスパニヤ学会にあわせて、本学にお招きしました。Bosque さんは *Nueva gramática de la lengua española* という 4,000 頁に近い大部のアカデミーの文法書の草案を書いた先生です。あいにくの台風のため参加者は少なくなりましたが、お二人からスペイン語の文法と音声についてのとても有意義なお話を伺うことができました。

Ignacio さんは私にとっても40年来の友人ですが、久しぶりにその早口のスペイン語に接して、さすがに初日は困惑しました。久しぶりの日本再訪でしたが、奥様ともども奈良、大阪、京都、東京の旅行も満喫されて帰国されました。

2013年の春に退職後も、外大では学部で「イスパニア語学概論」を教え、修士課程では「イスパニア語演習」で簡単なプログラミングをしながら大量のスペイン語テキストを処理しながら文法研究をする手法といったことを教えさせてもらっています。語文系の卒業生の方の中には「概論」の授業をとってくださった方もおられると思います。語彙を増やしてもらうことも念頭に、España => español => españolizar といった語の派生や、冠詞や接続法といったスペイン語文法の基本について相変わらず学生のみなさんといっしょに勉強しています。

退職前より時間ができたので、テレビや WOWOW で映画やドラマ、テニスや大リーグの試合を見たり、天気がよければ週に1、2回ドライブに出かけます。週

1のテニスはまだ35年も続けていますが、スピン・サーブらしきものが打てるレベルから上達しません。軽い運動と気分転換ぐらいのつもりでやっているから当然のことです。大学の授業の準備以外には、10年来準備している入門から初中級向けのスペイン語文法の参考書の原稿を書いています。みなさんと勉強したことを盛り込みながら書いていると、いつの間にか600頁を超えてしまったので、出版社からは当然のことながら半分に縮めるように言われています。完成したらみなさんに読んでもらえればと思っています。

最近は家事の手伝いも少しするようになりました。もっぱらチンするだけで、料理をしたり、洗濯をしたり、食材の買い物をしたりします。テニス、プログラミング、ドライブに加え、料理も趣味の一つに挙げられるようになればいいのですが…。もちろん、卒業生の皆さんからの近況報告も楽しみのひとつです。好きな言語はスペイン語と AWK と Perl です。プログラミング言語には、Python や Ruby や Java、さらにはブラジル生まれの Lua など色々なものがありますが、私の関心がある単語列の処理では、AWK と Perl が相変わらず一番速いです。テキスト処理をしながら、これからも大好きなスペイン語の勉強を続けていきたいと思っています。

みなさんのご健康とご多幸をお祈りしています。

現在のイスパニア学科

成田 瑞穂

1996年（平成8年）卒

前号のイスパニア会「会報」にて、野村竜仁先生が2005年から2012年までの神戸市外国語大学イスパニア学科の現状について詳説されていますので、今号では、2012年前後から現在までのイスパニア学科についてご報告したいと思います。

2011年より続けて、木村榮一先生、西川喬先生、宮本正美先生と長く本学で教鞭をとってこられた教授陣がご退職されました。先生がたの薫陶を受けた学生のなかにもスペイン語学、文学、文化の研究者に成長し、非常勤講師として本学の教育に尽力してくださっている方も多くおられ、心強い限りです。イスパニア学科専任教員も、川口正通先生、フアン・ロメロ・ディアス先生という新任の先生が入り、新体制と呼べる形になりました。学科代表福嶋教隆先生、副代表モンセラット・サンス先生、野村竜仁先生とともに、大学内外で活躍する優秀な教育者・研究者の集まる学科として学生に研究・学習の機会を与えています。

また学生の旺盛な留学意欲に応えるべく、イスパニア学科では近年留学制度をさらに充実させました。すでに長く交流の実績のあるオルテガ・イ・ガセット研究財団（トレド）、アルカラ大学（アルカラ・デ・エナーレス）以外にも、派遣留学協定校としてラ・リオハ大学（ログローニョ）、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学、セゴビア市における国立通信教育大学（UNED）があり、留学できる時期・場所の選択肢を広げています。さらにサラマンカ大学、マドリード自治大学とは交換留学協定を結び、留学先の学部正規課程の授業を履修することで本学の単位として認定する制度をスタートさせました。派遣留学と同様、卒業を遅らせることなく長期留学が可能であり、しかも語学コース以外の学部授業も受けられる利点があります。

サラマンカ大学への交換留学が2013年に始まり、2015年にはマドリード自治大学、サラゴサ大学との学生の交換が始まります。サラゴサ大学ではスペイン語コースのほか、現地の日本語講座で会話助手の業務をおこなうプログラムに参加し、サラゴサ大学から留学する学生も、本学の専攻イスパニア語科目に会話助手として参加してもらう予定です。さらに、これまでの協定校はスペインに限られていましたが、先生がたのご尽力により、現在、メキシコ自治大学との協定締

結も進められています。近年派遣留学と交換留学を組み合わせる長期留学する学生も出てきており、留学の成果を漏れなく単位化する制度の整備が今後の課題となっていくでしょう。一方で派遣・交換留学制度を利用せずに海外へ飛び出し、休学してヨーロッパやラテンアメリカ諸国を周遊して帰って来る学生もいて、いろいろな体験談を聞くのが教員としての楽しみになっています。

留学制度とは別に、イスパニア学科でスペイン語圏研究者を招聘し、講演会やワークショップを開催する交流もおこなっています。2012年から2014年にかけては、マドリード自治大学の Elena de Miguel 先生、スペインの若手小説家 Santiago Pajares 氏、スペイン語圏映画配給会社代表の比嘉セツ氏、マドリード自治大学 José Pazó 先生、サラゴサ大学 David Almazón 先生、コンプルテンセ大学 Ignacio Bosque 先生、スペイン高等科学研究所 Juana Gil 先生などの高名な研究者や文化人の方々に本学へお越しいただきました。学部生に向けた講演や院生とのワークショップは、学科スタッフや学生にとって刺激的な学習・研究の機会であり、今後も続けていきたいと考えています。

さらに、2014年秋にはイスパニア学科卒業生と在校生の交流の場として「ラテンアメリカフォーラム」という会が発足しました。中南米駐在経験のある卒業生との対話をとおして、在校生に中南米ビジネスへの興味を持ってもらうことを目的としたものです。第1回フォーラムには4名の卒業生のみなさんに講師として参加いただき、駐在中の体験談やラテンアメリカ経済の読み解き方などの貴重なお話をうかがうことができました。学生たちの学習意欲や就職活動への意識の向上に繋げられる本フォーラムも継続的に開催し、ゆくゆくは研究会のような自立した会になっていくよう、学科として協力していく所存です。

また、修士・博士課程においては、イスパニア学科教員の指導を受けたいとスペインからの入学者が増えつつあります。みなさんととても優秀な若き研究者であり、教員にとっても良い刺激になっています。一方で日本人学生の修士課程への進学者数は減少傾向にあり、優秀な学部学生の獲得のため、大学院課程の充実や魅力のアピールをしっかりと進めていく必要があるでしょう。

新体制となったイスパニア学科も、学術面での学生への指導はもちろん、社会の情勢や学生のニーズにも最大限応えられるよう制度を整え、教員一同、精進していきたいと考えております。

鼓直先生の叙勲について

西川 喬

2014年5月23日、鼓直先生はスペインから『文民功労勲章』(Encomienda de la Orden del Mérito Civil)を叙勲された。この勲章は、スペインのために功を成したスペイン人や外国人の、突出した業績をたたえるためにスペイン国王より授与される勲章である。鼓先生は東京のスペイン大使館において、Miguel Ángel Navarro Portera 駐日大使により、この勲章を授与された。

先生は長年に渡ってスペイン語教育に従事され、龍谷大学、神戸市外国語大学、神奈川大学、法政大学で教鞭を取られた。2000年に退職されて、現在は法政大学名誉教授となっている。

私は1965年から4年間に渡って、神戸市外国語大学において先生のご指導を得るという栄誉を得た。ただし、当時はそんな立派な気持ちなどはなく、外大で一番若い先生が、1年生の文法から2年生以上の講読を担当してくれるんだ、訳された日本語は美しいけれども、文法はちゃんと説明できるのだろうか、などと



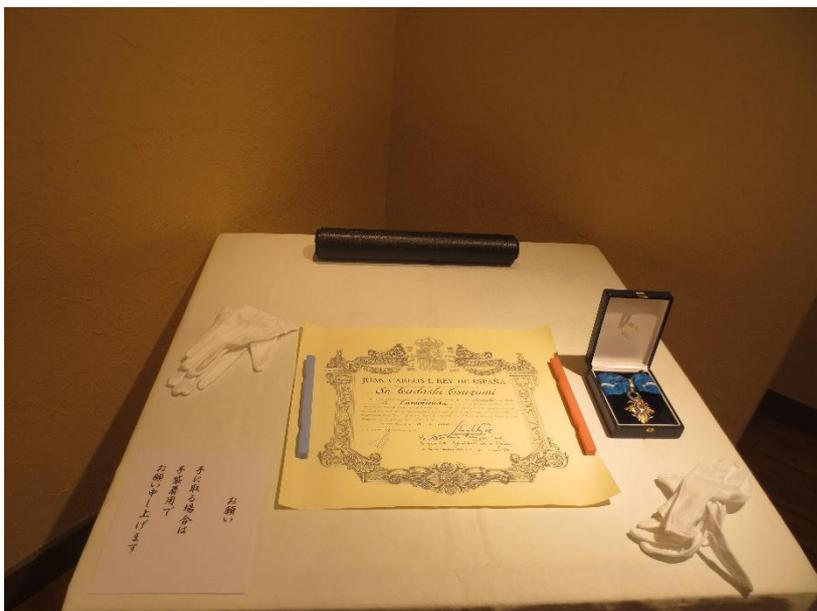
生意気で鼻っ柱が強い何人かの仲間と集まれば、鼓先生の授業についてそんな傲慢なことなどを話した記憶がある。当時、学生といえば、下宿にはテレビも冷蔵庫もない、携帯電話もパソコンも持たない、今の学生が持っているものはほとんどなかった。当然金もないが、そのかわり時間だけはたっぷりであった。本もよく読んだし(時間をつぶすには、それがもってこいだった)、授業の準備も結構やったものだった(長い夜に、他にすることがなかった)。さて、あれは3年生の時、鼓先生の講読クラスのことだった。教科書としてスペインの小説を使っていたが、その

本の中で今まで見たことがない接続詞の使い方に気がついた。それは、接続詞 y が全ての単語を結んでいる使い方だった。単語が列挙される場合、最後の二つの単語をつなぐやり方が普通だが、それ以外の使い方を知らなかった私は、授業が終わるとさっそく鼓先生に質問に行ったものだ。いままで、他の先生に何か質問した場合、それは来週まで調べておきます、と体よくかわされたことがあったので、今回もたぶん、そうなるだろうな、と思いながら、先生にこの接続詞の使い方はどういうものなのかと尋ねた。予想に反して、実に詳しい説明が帰ってきた。啞然とする私に、先生は追い打ちをかけるかのように、スペイン語でこの現象は polisíndeton と言い、全部省略するのは asíndeton と呼ばれるのです、と静かな声でおっしゃって、黒板にその文字を書かれた。ありがとうございました、と言うのが精いっぱい、まさに知識に圧倒された思いだった。ずっと後になって、東京で一緒にお酒を飲む機会があって、その時のことを思い出して、先生に言ったところ、そのことはよく覚えているとおっしゃった。君のクラスには熱心な人が何人かいて、質問されてもいいように、予め前の晩に Gili y Gaya の『Curso Superior de Sintaxis Española』をよく読んでいたからね、西川君の質問の時は、偶然そのページを読んでいたのさ、と笑われた。おそらく、「偶然」ではないだろうな、と思いつつ、話はそのまま当時の学生気質などに移っていったが、あの時の衝撃は今でも鮮やかに心によみがえってくる。先生は文学が専攻なのに、文法にも滅法強い、というのがあの当時の学生たちの、先生に対する評価だった。

私が先生の訳書を初めて読んだのは、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『緑の法王』だった。いい文章というのは、こういうことなのだろうな、という印象が残っている。先生の訳書はほとんど読んだが、特にホセ・ドノソの『夜のみだらな鳥』は、もはや文章がどうのこうのという次元ではなく、醸し出される妖しい世界に引きずり込まれて一気に読んでしまった。読み終わってから、こんな世界を作り出す言葉の力に改めて驚嘆したものだ。

鼓先生はガルシア・マルケスの『百年の孤独』に象徴されるように、主にラテンアメリカ文学の紹介に精力を傾けられてきた。しかし、同時にスペインの文学も視野においておられる。フェデリコ・ガルシア・ロルカの『ニューヨークの詩人』やエドゥアルド・メンドサの『奇跡の都市』などの翻訳もあるし、小学館から出された『西和中辞典』初版の監修も手掛けておられる。まさに、「突出した」業績と呼ぶにふさわしい。

祝賀会は、2014年9月7日、日曜日、午後6時、神戸駅近くの「天安閣」で行われた。31名が参加したが、東京、静岡、福岡など遠方から、さらには香港からかけつけられた方もおられた。まさに鼓先生の人徳のなせるわざであろう。式次第を見れば、この式が和気藹々と進んだことがわかる。



らかけつけられた方もおられた。まさに鼓先生の人徳のなせるわざであろう。式次第を見れば、この式が和気藹々と進んだことがわかる。

鼓直先生叙勲祝賀会 式次第

- | | | |
|-----------------|--------|--------|
| 1) 叙勲祝賀会開会 | 司会 | (西川喬) |
| 2) 勲章の説明 | 司会 | |
| 3) 乾杯のご発声 | 田尻陽一氏 | (1期生) |
| 4) 歓談 | | |
| 5) 祝辞 | 木村榮一氏 | (1期生) |
| 6) 祝辞 | 谷善三氏 | (2期生) |
| 7) 祝辞 | 森田與一郎氏 | (3期生) |
| 8) 祝辞 | 池沢英一氏 | (4期生) |
| 9) ご挨拶 | 鼓直先生 | |
| 10) 鼓先生へのお祝い手渡し | 高橋重子氏 | (4期生) |
| 11) 歓談 | | |
| 12) 祝辞 | 柴野元秀氏 | (5期生) |
| 13) 祝辞 | 内田雅夫氏 | (6期生) |
| 14) 祝辞 | 森川香織氏 | (53期生) |
| 15) 歓談 | | |

- | | | |
|-------------|-------|-------------|
| 16) 祝辞 | 野村竜仁氏 | (イスパニア学科から) |
| 17) 祝辞 | 西川喬 | (イスパニア会から) |
| 18) 閉会 | 司会 | |
| 19) 全員の記念撮影 | | |

2次会を経て、解散となり、鼓先生と何人かの方々と一緒に三宮で飲み明かそういうことになった。実際に、朝まで飲み明かしたのだ。夜も更けて、何人かがもう眠いという顔をしているなかで、先生は教えていただいていたあの頃と同じ静かな声で、今はペルーの詩人オケンド・デ・アマーが最も気にかかる前衛派の一人ですね、少しずつ翻訳を進めています、とおっしゃった。80歳をとうに超えられても、尽きることのないこの情熱はどこから来るのだろうか。



海外生活

スペイン語に出会って…50年

吉田 尤彦

1969年（昭和44年）卒

丁度50年前、ラジオから流れてきた「アベ・マリア」がその後の人生に大きく影響を及ぼしたと言っても過言ではなかろう。18歳の大学受験生は、耳に飛び込んで来たその歌曲に感動してしまった。何と甘美な曲だろうか、テンポの良い音が連続して耳に飛び込んで来た。漠然と将来は海外と関わりのある仕事に就きたいと思っていた受験生は、この歌の歌詞、スペイン語を学んで夢を叶えようと決めるのにさほど時間が掛からなかった。そして神戸の灘区の地獄坂の上に構える神戸市外国語大学に入学した。

故郷静岡を後にして、大学図書館の裏手にある僅か二畳の部屋のアパートに入り込んだ。その夜、寝そべって天井を見上げ、これからの一人住まいを思うと不安と寂しさで自然と涙が頬を伝わった。卒業までの四年間は、洒落た街神戸で友・先輩・後輩に恵まれ実り多き時間だったが、勉学の面では出来の悪い生徒だったと思う。応援団の学ランを着たバンカラ学生で、下駄をはいて授業に出席し、何度か先生に注意された。

卒業後、暫くして浜松市にある鈴木自動車工業株（現スズキ株）に就職した。最初の配属先の輸入部門で二、三年貿易実務、外国為替の基礎を学んだ後、船外機(Motores fuera de borda)の中南米課に配属された。その当時、スズキの中南米向け輸出実績は皆無に等しかった為、上司の通訳を兼ね市場調査を一から進めることになり、会社案内書と商品カタログ更に“日本”を知って貰うべく、市販の日本紹介ガイドブックを携え、Mazatlán(メキシコ)、Punta Arenas(チリ)等の漁港、及びMagdalena川(コロンビア)、Ucayali川(ペルー)、Orinoco川(ベネズエラ)等の“船外機市場”に足を延ばし、代理店設定活動を行った。数か月後、出張を終え帰宅すると次男が、日に焼けた髭面の知らない人との出会いに大声で泣き叫んだことを今でも思い出す。この出張及びその後の中南米出張中に実に稀有な体験・経験、出会いがあった。ベッドのないハンモックのホテル宿泊、道路脇に放置された人の死体、上司のカバン窃盗犯取り押さえ事件、札束携えて入ったインフレ国の日本食堂、ホテルの窓を通して見た眼下の戦車の隊列、Selvaで出会った手のひらサイズの蛍、アマゾンで船外機が川底の石に当た

り航行不能となり漂流してしまった事等々枚挙にいとまがない。

中南米諸国の代理店設定も一段落した後、販売が落ち込んでいたアメリカの船外機拡販を命ぜられてスズキ・アメリカに駐在したのは42歳の時で、家族4人での海外生活だった。仕事面では、本社の期待に応えられず苦悩の毎日だったが、終業後清掃スタッフとしてオフィスに来ているメキシコ人との会話は、スペイン語ブラッシュアップに役立った。

アメリカから帰国し、本社で数年勤務の後スズキ・スペイン社(Gijón市)への駐在辞令を受けた。同社は主として欧州向けのスクーターの生産・販売及び日本からの二輪車(Motocicletas)を輸入販売する従業員300名程の現地法人会社で、その責任者として約5年間スペインで過ごした。赴任後先ず驚かされたことは、昼食時食堂の各テーブルに、一本のワインが置かれていたことと、工場内の自動販売機にビール缶が入っていたことだった。スペイン人の国民性とは言え、二輪車メーカーが就業中にアルコールを提供するのはもっての外と思ひ、スペイン人の副社長と一緒に労働組合と交渉を重ね、時間が掛かったがその撤廃にこぎつけた。労働協約、ストライキ等組合との交渉は未経験の分野でもあり、実に骨の折れる仕事だった。一方販売網拡充の為、訪れた地方の文化との触れ合いと風俗習慣の新発見、休日のカンタブリア山系の登山、バスク料理の美味との出会い、現地人の家庭訪問等、貴重な体験を女房と共有することが出来た。帰任命令の国際電話が掛かって来たのは、2001年の春だった。その後、数年本社で若い人と中国製スズキ二輪車の拡販に携わり、2009年夏退職の日を迎えた。

退職後何をすべきか、導いた答えが身近にいる中南米の人に“何かをしてあげる”ということだった。幸い、外国人とりわけ中南米人が多く居住するここ浜松市の教育委員会に“外国人児童生徒就学サポーター”として任用され、市内の小・中学校で外国籍児童(主に中南米国籍)に日本語と授業内容理解の為の支援及びその保護者への学校連絡文書の翻訳と面談(家庭訪問、三者面談等)の通訳を行っている。スペイン語圏を含み商談で訪問した50数か国の人々と接して得た経験が現在の“仕事”に少しでも役に立てれば幸いと思う。

50年前のあの一曲との出会いがなければ、このようなエキサイティングな海外生活を送ることが出来ただろうか。今はその出会いと、海外との関わり合いのある仕事に就きたいという少年時代の夢を叶えてくれたスペイン語に感謝したい。

海外便り

住み慣れた香港から

永富 靖代 (旧姓 岩本)

1971年 (昭和46年) 卒

鼓直先生がスペイン国より「文化功労勲章」を叙勲された祝賀会が9月7日神戸で行われ、出席させていただきました。その折に西川喬先輩から会報のことを伺い、投稿させていただくことになりました。

イスパニア学科を卒業した方々からの投稿はイスパニア語圏からのものが多いのは当然でしょうが、私は香港からです。夫の駐在で、約25年香港で生活しています。1986年から1997年までが1回目、2度目は2002年から現在に至っています。この間の変化を交えながら、香港の近況を主観的ですが少しお話したいと思います。

1986年、香港は10年後に中国返還を控え、一部の香港市民は将来に不安を抱えていたのか海外への移住を考えていました。アメリカ領事館の前は連日長蛇の列でした。東日本大震災の後、香港で屈指の中文大学を出た優秀な若い金融マンが、東北の人々が変わり果てた地に愛着を示し、一刻も早く帰りたいと話しているのをテレビで見て、「どうして安全な所へ移って暮らさないのですか。」と聞いてきました。自分ならどこか他の安全な所へ移住すると言うのです。日本人にとって、将来に不安を覚えた時に住む所を変えるということなど考えられるでしょうか。郷土愛とか住んでいる土地への愛着といったものがないのかなと考えてしまいました。香港においては返還直前の現象といい、経済的に余裕がある人の一般的な考えだと推察します。香港の歴史的な事情があるのかもしれませんが。どこであろうと心地よく暮らせるところを選ぶ。こういった傾向は、返還時に交わされた一国二制度のもと、50年間は政治体制を変えないという確約が実施され、以前と変わらない生活が保障されると、海外に移住したものの思い通りではなかった人達が香港に戻ってきたということからも窺えると思います。

一般的に共働きが多く、外資系の会社、政府関係の職場では女性も正當に評価され管理職も多いです。こういった家庭では、アマさん (日本人社会では家政婦のことをこう呼んでいます) を雇っています。アマはフィリピンからの出稼ぎがほとんどでした。それが、ここ10年程前からフィリピン人に加え、インドネシ

ア人のアマがたくさん働いています。理由はよくわかりませんが、インドネシアの方が賃金が安いと聞きました。日曜日、セントラルではフィリピン人、コーズウェイベイではインドネシア人のアマが集まっていて、香港の特異な風景です。地方ごとに集まっているのでしょうか、それはそれはすごいものです。

20 数年間で著しく変化したと感ずるのは、女性がお洒落になったことです。30 年程前、庶民的な場所では家族揃っての飲茶(ヤムチャ)はパジャマ姿も見受けられたそうです。化粧をしている人も少なかったと思います。それが 2000 年頃から急に若者がお洒落に敏感になってきました。インターネットが普及してからでしょうか。日本で流行しかけるとすぐ香港でも広がります。

2002 年から非常勤で日本語教師をしており、日本語の他に日本文化の紹介



(今年の夏、日本語クラスの学習者と共に)

として仮名習字も教えています。2000 年頃に比べて日本語熱は下降気味で、ここ数年は韓国語に押されています。この現象はドラマとポップ音楽が大きく影響しています。以前の日本語熱も、日系の企業が多かったことに加え、この現象の表れだったと思います。現在日本語を熱心に学んでいる人たちに聞くと、日本のアニメが好き、旅行に行くととても好きになったのもっと知りたいというのが主な動機です。何度も日本に旅行している人がたくさんいます。そして、そのほとんどが日本人のマナーの良さと、街の清潔さに感激して帰ってくるのです。お習字のクラスに参加する学習者も、日本人以上に日本の古い文化に興味を

持って熱心に学んでくれます。

中国返還後の香港は一国二制度のもと、50年間は政治体制を変更しないと確約しましたが、選挙方法を巡って民主化団体の抗議デモが徐々に激しくなってきました。それが10月初めに頂点に達し、日本でも大きく報道された学生デモに発展したのです。幹線道路を占拠した抗議活動は2か月に及びました。住居のすぐ傍の道路が占拠され、抗議内容や激励のビラが貼られて、時折演説のような声が聞こえました。整然とテントが張られ、まるでキャンプ生活をしているようでした。香港島で最も賑やかな所なので、買い物客や観光客が盛んに写真を撮っていました。日本の抗議活動とは随分違うものだと感じたものです。

近年、観光客はもっぱら中国本土からで、その購買力には驚きます。香港の観光収益は彼らのおかげとあっていいと思います。ここ数年の顕著な変化といえば、こういった中国本土の影が強くなってきていることです。街では普通語が声高に話され、学校でも必須科目になっています。一方で、スーパーのレジ横や道路で旅行かばんを広げて買い物した品を詰め込んだり、トイレ以外の場所で子供が用を足したりなど、彼らの公共マナーの悪さが取り沙汰されています。中国本土の中国人と自分たちは文化のレベルが違うと思っている香港市民がいるのも現状です。日本語のクラスで、「私は〇〇人です。」という文章を扱うとき、学習者に「私は中国人です。」と中国の一部になった香港で素直に教えることができないのが実感です。

同期会便り

幹事役 伊藤 明
1966年（昭和41年）卒

平成26年11月1日（土）大阪の“アサヒスーパードライ梅田”にて1期、2期生合同の同期会を開催、鼓直先生もご参加いただき、あわせて受勲のお祝いもできました。東京、静岡方面からも5名の出席もあり総勢19名ととても賑やかな会となりました。中には卒業以来40数年ぶりの再会となった方々もいて、しばし学生時代にタイムスリップして、また全員から近況など報告もあり、時間もオーバーしてのあつという間の楽しい3時間半でした。またの再会を期して散会。



後列左から伊藤明、穴川、阿部、谷、柏木、杉井、中村、吉川、足立、津田
前列左から中津、伊藤嘉、嶋田、鼓先生、中西（寺島）、清原（安田）深野、工藤、
（敬称略）萩原氏は途中退出

学術活動

定年を迎えて

イスパニア学科 1 期生
田尻陽一
1966 年（昭和 41 年）卒

2014 年 3 月 31 日をもって関西外国語大学を定年退職しました。1969 年に非常勤講師の職を得てから 46 年間スペイン語を教えてきました。定年を迎えると時間的に余裕ができ、何かと気分的に楽になるだろうと思っていたのですが、これは大きな間違いだと気づきました。確かに授業をしなくてもいい、教授会や各種委員会に出なくてもいい、と教務関係の仕事や雑務から解放されたのですが、演劇と研究の仕事に定年はなかったのです。



ボクの演劇関係の仕事は劇団活動とスペイン演劇の翻訳の二つの分野にわたっています。まずは劇団活動の話をしてしまおう。1980 年、スペイン演劇を専門に上演する劇団を仲間と作ってはや 35 年、阪神大震災の翌年 1996 年からは 19 年間、すべてボクの翻訳・脚本で上演してきました。ガルシア・ロルカの『ドニャ・ロシータ』『血の婚礼』『イェルマ』『ベルナルダ・アルバの家』『ドン・ペルリンプリンの恋』『五年経ったら』、フェルナンド・アラバールの『建築家とアッシリア皇帝』、アレハンドロ・カソーナの『デカメロン』といった現代物から、フェルナンド・デ・ロハスの『ラ・セレスティーナ』、セルバンテスの『ドン・キホーテ』『ヌマンシア』、ロペ・デ・ベガの『フェンテ・オベフーナ』『オルメドの騎士』、カルデロン・デ・ラ・バルカの『人生は夢』といった古典物にいたるまで、さらには『ロルカ 閉ざされし楽園』といったオムニバス作品を入れると、これまでに 15 作品を舞台に載せてきました。

スペインでもアルマグロ、サラマンカ、ムルシア、アルメリーア、オルメド、マドリード、アルカラ・デ・エナレス、バルセロナで公演してきました。

今年はオクタビオ・パス生誕百周年ということで、メキシコ大使館からオクタビオ・パスの唯一の戯曲作品『ラッパチーニの娘』を翻訳し上演しないかという話を持ちかけられました。スペイン以外の国の作品を取



りあえげるのは初めてです。誌的な文体をいかに日本語の舞台言語に翻訳するか、苦勞しましたが、出来栄は上々、見事な舞台成果を生みました。これならメキシコに持っていけそうです。

と同時にスペインのオルメド古典演劇祭から『オルメドの騎士』を持ってきてくれといわれました。日本スペイン交流 400 周年事業の一つにも取り込まれています。7月19日に渡西し、20日に舞台を仕込み、21日が本番、翌日帰国という慌ただしい日程でしたが、無事公演終了。スペイン演出家協会が発行する“ADE”という雑誌に次のような劇評が出ました。「クセック ACT の『オルメドの騎士』は完璧にまとまった芝居であり、舞台芸術の本質にわれわれを誘ってくれる。彼らが創り出す舞台芸術の美学によって、漫画をも彷彿させるような絵の連続の中に、伝統と近代性、肉体的表現と台詞が奏でるリズム、悲劇的のものとグロテスクなもの、恐怖とユーモアとが凝縮されていく。生と死、男女の性別、芝居の種類、舞台表現の境界線を超越する芝居である。」ボクの知っている劇作家から、どうしてオルメドで公演すると知らせてくれなかったのか、別の日にオルメドに行ったら、日本人の劇団がすごい『オルメドの騎士』をやったといっていたが、それはお前たちだったのか言われました。

もう一つはスペイン演劇の翻訳の仕事です。『現代スペイン演劇選集』全3巻をカモミール社から出しました。関心のある方はぜひご購入ください。たぶん、演劇書ですから一般の書店には並ばないかと思います。紀伊国屋、ジュンク堂などの大型書店に行ってみてください。あとは Amazon でしょうか。

この選集を監修するにあたり、いつからをスペインの現代と考えるかという問題に直面しました。いろいろと検討した結果、1985年 EU 加盟以降、つまりヨーロッパからスペインは民主国家であると認められた年以降を現代と考えました。しかし、フランコの死後から民主国家にいたるまでの10年間、いわゆる移行期に書かれた作品も無視できません。そこで、フェルナンド・フェルナン・ゴメスの『自転車は夏のために』を加えました。それ以外はすべて1985年以降に発表された作品ばかりです。全3巻で13人の劇作家が書いた13篇の長編と10編の短編を載せました。いまマドリードの舞台にかかっている作品もあります。

11月にもスペインに行き、第1巻に載せた劇作家に本を手渡ししてきたのですが、家まで食事に招待してくれたり稽古場を見学させてくれたり、本当によろ



んでくれました。『現代』というなら、現代を代表する作家はあと5人いるという忠告を受けたり、この作品が自分の最新作だからこれも載せてほしいといわれたり、スペイン著作権協会からは30歳代の若手6人の作家を紹介してもらいました。となると第4巻、第5巻と企画していかないといけません。さて、そこまで元気でやっていけるかな？ 翻訳といえば、いまセルバンテスの戯曲集も監修・翻訳しているところです。これは2016年、セルバンテス没後400周年記念事業として出すことになっています。いやはや、定年後のほうが濃い時間となってしまいました。ゆっくり温泉に浸かり、うまい酒を飲みながら、気ままに翻訳を楽しむという生き方はいつごろからできるでしょうか。

もう一つ、定年がないのは研究者としての生活です。イスパニヤ学会と演劇学会の理事、比較文学会の関西支部幹事の職は、定年退職即役員解任とはいきませんでした。任期まであと2年から4年、全うしなければいけません。65歳以上には被選挙権がないと会則で決めてくれば良いのですが、これはいくらボヤいても仕方がないことではよね。

もう一つは文科省の科研費があと1年、残っています。「ロペ・デルエダからセルバンテスにいたる道化芸の系譜」というテーマです。ロペ・デ・ベガやカルデロンの芝居には道化という役者は出てきま



すが、ロペ・デルエダの戯曲に見られる道化芸を舞台上で披露することはありません。若いころにロペ・デルエダの芝居を見たセルバンテスは、「黒人女、ごろつき、間抜け、ビスカヤ人、この4つや他の役を見事に演じた」といっています。この道化芸はどこに行ってしまったのだろうか、そう考えているときに2000年にモロッコのマラケシュのジャマ・エルフナ広場で見た大道芸を思い出しました。このフィールド調査をやってみようと科研費に応募すると採択されました。2014年は3度もマラケシュに行き、6組の芸人たちを追っかけました。いま、その報告書をまとめているところです。科研費の採用期間は3年間ですが、もう一度応募してみようかな、中途半端で辞めるわけにはいかないと欲がでてきました。体力がなくなるまで、フィールドワークはやってみよう。書齋に閉じこもるのはもう少し後かな、そう思いながら毎日を送っています。

在校生と中南米駐在経験卒業生との交流会

「第一回ラテンアメリカフォーラム」
(在学生と卒業生との交流会) 2014年11月26日開催

谷 善三
1967年(昭和42年)卒

母校にイスパニア学科が誕生したのは昭和37年(1962年)、それより約10年前から、「ラテンアメリカ研究会」(通称ラテ研)なる文化部がありました。英米学科の学生を中心とした、スペイン語と中南米の政治、経済、文化を勉強するのが目的のクラブ活動であったようです。しかしイスパニア学科が新設されてから7,8年後でこの文化部は母校から無くなっています。それから長い年月



が経ち、今から5年前よりこの「ラテ研」の部員だったOBが毎年神戸のレストランに、多い時は20人くらいが集い懇親会を開くようになりました。そんな中、誰からとなく、あんな素晴らしい文化部が復活したら良いのにとの声

が上がっていました。

私は母校でこの数年「商業イスパニア語」の非常勤講師をしています。大学のカリキュラムにラテンアメリカの政治・経済関連の講座がないのが気になっていました。講義の合間に学生にラテンアメリカの話しをするよう心掛けていますが、話題を提供する程度にしか過ぎず、もどかしい思いでいました。学生が就職してスペイン語をビジネスで活かす舞台は、スペイン本国より、圧倒的にラテンアメリカのほうが多いはず。このギャップを埋める方策はないものか常々考え、私のようなラテンアメリカに駐在していたOBが、学生にビジネスを

中心にした経験などを話したり学生の質問に答える交流の機会を作ったかどうかという考えにいたり、大学のイスパニア学科の先生方にこのアイデアを持ち掛けたところ、賛同して下さり成田准教授を中心に具体化していくことになりました。サンス教授はForo Latinoamericano と名前を付けてこのアイデアの方向付けをして下さいました。

OB 側は、ラテ研 OB 3 名（英米学科出身で昭和 39 年卒の小西諄次さん、イス



パニア学科一期生の伊藤嘉太郎さんと二期生の私) それにイスパニア学科昭和 50 年卒の斎藤仁さんも加わってくることになりました。

事前の打合せの中で、伊藤さんからは中南米に関

する資料の提供があり、これらの良く整理された資料（8 枚）は、大学の先生方にも学生にも私達 OB の真剣度を示すことが出来たと思っています。外務省に要望して中南米の概要のパンフレットを 2 種類、各 30 部送付してもらうことも出来ました。

このフォーラムに参加を呼びかける、成田先生作成のチラシは以下のように簡潔で、インパクトのあるものでした。

“Foros Latinoamericanos (ラテンアメリカフォーラム)”

ラテンアメリカでの駐在経験のある本学卒業生と在校生の交流の場として、Foros Latinoamericanos が発足しました！長く中南米のビジネスに携わってきた先輩方に参加して頂く交流会です。実務の体験談を聞き、皆さんから積極的に質問をぶつけることで、日本とスペイン語圏のビジネス事情を理解できる絶好の機会です。本学学生は誰でも参加できます。奮って参加して下さい。

このチラシをスペイン語の先生方がご自分の講義の時間に配布して学生に参加を呼び掛けて下さいました。

11月は大学の行事が多く、特に当日は就職関連の説明会がありましたので、どれだけの学生が参加してくれるか、初めての企画でもあり、大変心配しました。しかし、開始時間には、会場に学生21名の姿があり、大学からはサンス教授、成田准教授それにスペインとチリ出身の二人の講師の参加を得て、始まりました。

フォーラムでは先ず成田先生から改めてこの交流会の趣旨の説明がありました。次いで配布した「ラテンアメリカ・カリブ地域の概要」で、この地域の規模、将来性などの認識を高めて関心を深めてもらうことを目的として説明をしました。「概要」の後半には「外大生の皆さんに期待すること」などを話をさせて頂きました。次いで配布した資料(8枚)の見方、活用の仕方を伊藤さんより詳しい説明がありました。この説得力のある説明に学生は納得し、更なる深い認識を持ったことと思います。それから4人のOBが夫々の海外駐在経験と現役の後輩に期待することをリレー式に話しました。

最後の30分間で学生からの質問を受けたのですが、予定の時間ギリギリまで8人の学生からの質問が次々と続きました。フォーラムを終えた後にも数名の学生がOBに様々な質問をしてきました。学生たちの真剣な眼差しが印象的でした。

アンケートをした結果から、全員が是非このようなフォーラムを続けて欲しいという回答がありました。大学もこのフォーラムを続けて欲しいとの希望もあり、今後できれば年に3、4回の頻度で実施したいと考えています。このフォーラムに海外駐在のご経験のあるOBに参加して頂きたく、その時はイスパニア会の皆様のご協力をお願いしたいと思っています。

近い将来、母校に学生たちが自主的にラテンアメリカ事情を研究する「ラテ研」のような文化部が発足してくれること、ならびにラテンアメリカ事情の講座ができることを願っています。

卒業してから

大学卒業後のスペイン語活用について

谷口 里沙

2013年（平成25年）卒

大学を卒業し、社会人として働きだしから早くも1年半が経ちました。私は自動車部品メーカーに入社し、現在社員の人材育成と社内の改善を担当する部署に所属しています。私がこの会社を選んだ理由でもありますが、当社はメキシコに拠点があり、近年中南米諸国に販売拠点を広げていることから、メキシコや中南米諸国から自動車関連会社のお客様が会社訪問に来られることがあり、その際スペイン語で工場見学や部署案内をさせて頂いております。

先日、メキシコ自動車部品会社の責任者育成コースの一環で、日本企業を訪問して日本の改善活動を学ぶ研修があり、各メキシコ部品工業界の社長や部門責任者を含む研修生の一団が弊社に会社訪問に来られました。その際、会社説明・弊社における改善活動・工場見学の一連の案内をやらないかと上司からお声をかけて頂き、この経験は必ず今後の糧になると思い、引き受けさせて頂きました。長時間にわたる研修会は精神的にも体力的にも負担が大きかったですが、周りの方からご助力頂き、研修生にご満足頂ける内容を提供することができました。

この業務で成功の鍵となったのは日頃のスペイン語の語学力の維持、向上に努めていたことでした。今回1ヶ月以上の時間をかけて資料作成・発表練習を行なうことができましたが、もし文法力やスピーキングなどの基礎力がなければ達成することはできなかつたと思います。普段の業務ではスペイン語を使う機会はほとんどないため、語学力を維持するには前述したような社内でスペイン語に関わる業務を担当させてもらうか、プライベートの時間の訓練に限られています。現在私が取り組んでいる訓練をいくつかご紹介させて頂きますと、まず私は社内のスペイン語圏出身の外国籍社員やスペイン語学習経験者を集めて、就業時間後に30分ほどのスペイン語フリートークの時間を設けています。まだこの活動始めてから2ヶ月弱しか経過しておりませんがスピーキングの力をビジネスで使えるまで向上できるよう、新聞や本を事前に読み、その内容について話すという練習をしています。また月に2回、西宮国際交流協会が主催する「スペイン語おしゃべりの会」と「時事スペイン語を読む会」

に参加しています。「スペイン語おしゃべりの会」に関してはイスパニア語圏の方をお呼びし、母国について話していただいております。ここでは日本以外の文化を学べると共に、聞く力を養う機会となっています。「時事スペイン語を読む会」に関しては、自分の興味のあるイスパニア語圏の新聞を日本語訳し、講師に添削頂いています。ここでは読解力を向上させ、時事の単語を学ぶと共に、日本語訳にする際、単にイスパニア語の意味だけをとらえた訳にするのではなく、新聞の書き方を意識した、日本語でも意味の通る文章になるように推敲を重ねる練習をしているため、イスパニア語と共に日本語の力が向上しています。

また、私はチリへの留学を含め、計5年かけて勉強したイスパニア語を仕事で使いたいため、2014年4月から5月の2ヶ月間には、大阪のイスパニア語学校が主催し、神戸市外国語大学のOBの方が講師を務めるビジネススペイン語講座を受講しました。そこでは、売上げや為替、市場などの企業活動に深く関わりを持つ特別な単語・文章から、ビジネスでイスパニア語を書くときの注意点、メールの書き方などを学ぶことができました。ここで学んだ内容は、前述したメキシコ研修に向けた資料作成時に大変参考になりました。

ここまで私のイスパニア語の維持・向上に向けた取り組みを述べさせていただきましたが、第一に大事なことは、イスパニア語を学ぶ姿勢を持ち続け、常にイスパニア語圏の情報にアンテナを張っておくことだと思います。忙しいことを理由に自己研鑽を怠ってしまうと、出来てしまったギャップを埋めることは大変困難で時間がかかります。そのため私は仕事の休み時間や通勤時にイスパニア語圏の新聞を声に出して読んだり、休みの日に映画を見て、イスパニア語に関わる機会を出来るだけ作るようにしています。また前述した「スペイン語おしゃべりの会」と「時事スペイン語を読む会」などに参加し、イスパニア語関連の知り合いを作り、勉強する場に入ることで、勉学へのモチベーションの維持を図っています。このように卒業後もイスパニア語と関連を持ち、自己研鑽を続けることが仕事やプライベートを含めてイスパニア語を使えるチャンスが来た時に、積極的に手を挙げられる自信につながっていると思います。

現在、仕事ではイスパニア語を使う機会はまだまだ少ないですが、今後も語学力の向上に努め、メキシコなどのイスパニア語圏で働くチャンスを掴みたいと思います。プライベートでは、2020年の東京オリンピックに向け英語・イスパニア語で観光通訳の資格取得に励みたいです。またもう一度中南米を旅行し、留学時代の友人に会い、さらに自分の可能性を広げたいと思います。

学生からの留学記

スペイン・トレド派遣留学体験記

押部 大空

イスパニア学科4年

2013年9月から12月まで、スペイン、トレドのオルテガ・イ・ガセット研究財団にて、派遣留学生としておよそ3か月半の留学をさせていただきました。私にとって、スペイン留学は、大学入学当初からの夢だったので、その夢が叶ってとても嬉しい反面、当時2回生としては初めての派遣留学生という事で、不安な気持ちもありましたが、先生方に強く勧めていただいたのもあり、スペインに赴くことを決意しました。

同年9月4日、私は、約20時間という長い長いフライトを経て、初めてスペインの地を踏みました。夜中だったにもかかわらず、飛行機で相席だったスペイン人の方に抑えきれない興奮を悟られてしまうほどでした。しかしそれが一転、それからトレドに行くまでの2日間は、右も左もわからない異国に1人いることに不安がこみ上げ、唯一日本と連絡の取れる手段であるiPhoneを固く握りしめ、ホームシックぎりぎりの状態をさまよっていました。

しかし、古都トレドは世界史の好きな私にとっては、本当に夢のような中世の街でした。世界遺産の建物に住み、毎朝近所の教会の鐘が決まった時間に起こしてくれて、車の騒音は聞こえず、落ち着き切った素晴らしい生活でした。スペイン式の生活に慣れるのは多少時間がかかりましたが、ひとたび慣れてしまうと、スペインに来た当初の不安も忘れ、日本の生活が窮屈に思えてしまうほどでした。

その年の日本人の留学生は私だけだったので、当初は心細く感じることももちろんありました。周りは、スペイン語歴の長いアメリカ人たちばかりで、それに比べて、自分のスペイン語があまりに通じない事に落ち込んでしまった時期もありました。そんな時に、ルームメイトだったプエルトリコ人の友達や、現地コーディネーターでイスパニア学科の大先輩の岡崎由紀子さんに励ましてもらったりしながら、自分にできる最大限の努力で授業や膨大な課題に立ち向かう毎日が続きました。その結果、先生方には努力を誉めていただき、試験でも良い成績を得られるようにまで成長することができ、次第に自信を持てるようになってきました。「人前ではスペイン語しか話さない!」という自分のルールを決めて生活し、できるだけスペインの文化や社会に溶け込むように努力し

ていました。1人で街を歩き回ったり、異国で美容院に行ってみたり、各地を1人で旅行したり様々なことを挑戦しました。そのほか岡崎さんの計らいで、学内で日本語教室を持たせてもらったり、スペイン人たちの前で神戸外大の紹介プレゼンをしたり、本当に貴重な体験をさせていただいていました。

授業では、必ず一番前に席を陣取って、電子辞書を片手にノートをとっていました。電子辞書が離せないそんな姿を見て、仲間たちには「君にとって電子辞書はBiblia(聖書)だね!」という冗談を言われていました。まさにそうだったと自覚していますが、その「聖書」の使用頻度は、日を重ねるごとに減っていき、スペイン語ができるようになってきたのだと自覚するようになっていました。授業ではスペイン語でレポートを書いたり、プレゼンをしたりする機会が多々あり、その経験はいまでも作文の授業などに役立っています。現地での勉強は、今の自分の原点になっていて、特に歴史の授業で取り扱われたスペイン現代史の内容は、現在ゼミでの研究テーマとなっており、いかに私にトレドでの学習が影響を与えたかはもはや計り知れないと言えます。

そういった意味でも、私はこの留学が単なる「語学留学」ではなく、真の意味での「留学」だったと言える所以でもあります。日本でみっちり詰め込まれたスペイン語の基礎をさらに磨いて、そのスペイン語を使って新しい知識を得るといった理想的なサイクルを構築することができ、最終的には自分の研究テーマを見つけ、様々な活動を通して自分を見つめなおして、新たな価値観や考え方を手に入れることができたことにこの留学の本当の意義があったのだと思っています。

留学生活は、楽しいことばかりではありませんでした。辛いことも沢山あったし、悩んだことも沢山ありました。しかし、この留学を通して得たものは数えるときりがありません。この留学はこれから先の私の大学生活、更には人生に大きな影響を与えてくれました。私は今、これから先もスペイン語やスペイン文化についてさらに詳しく学びたいので、大学院に行くことを目標にして勉強に励んでいます。それは、私が留学生活を非常に有意義に過ごすことができ、自分の目標や将来の展望を見出すことができた結果だと痛感しています。とはいえ、この留学が私にとって有意義になったのは決して自分だけの力でなく、この留学に当たって私に関わってくれたすべての方によるものです。日本に帰ってきて早1年。すべての方に感謝しつつ、自分の目標をかなえるためこれからも日々精進していきたいと思います。

語劇祭

会報編集委員会

2014年12月6日（土）と7日（日）に、恒例の語劇祭が開催された。イスパニア学科の出し物は、原作 Antonio Buero Vallejo の En la ardiente oscuridad（燃ゆる暗闇にて）でした。各劇団とも演出・構成など工夫をこらした舞台上、熱演が繰り広げられました。

最優秀劇団賞	イスパニア語劇団
最優秀男優賞	小西 一樹（イスパニア語劇団・3年）
最優秀女優賞	川上 由梨子 松元 梓（英米語劇団・2年）
優秀劇団賞	中国語劇団
優秀男優賞	小島 拓也（ロシア語劇団・2年）
優秀女優賞	森 春奈（イスパニア語劇団・1年）
審査員特別劇団賞	第二部英米語劇団
審査員特別男優賞	国分 陽介（ロシア語劇団・2年）
審査員特別女優賞	須藤 美玲（第二部英米語劇団・2年）
ベストキャラクター賞	川上 由梨子 松元 梓（英米語劇団・2年）
	藤井 遥菜（中国語劇団・2年）
	須藤 美玲（第二部英米語劇団・2年）
	森 春奈（イスパニア語劇団・1年）
	小島 拓也（ロシア語劇団・2年）
音響賞	イスパニア語劇団

照明賞	イスパニア語劇団
衣装・メイク賞	第二部英米語劇団
舞台美術賞	中国語劇団
字幕賞	イスパニア語劇団

イスパニア語劇





「イスパニア会会報」第1号
編集委員会活動報告

会報編集委員 田岡 敬造
1976年（昭和51年）卒

2001年6月に「イスパニア会」が発足し、2度の総会などの活動を開始して以来、会員より会報を発行してほしいという依頼が根強くあり、2013年6月の理事会で「会報編集委員会」の立ち上げが承認されました。

メンバーは、西川先生を委員長に、谷善三さん（16回卒業）、伊藤かお里さん（44回卒業）そして25回卒業の私の4名で、会報作成と編集委員会規定を作成する目的で、2013年9月より活動がスタートしました。

まず西川先生より、会報作成表の案が提示され、2014年2月下旬の完成を目標に、日程（スケジュール）、一般原稿執筆及び「会員の近況」依頼の方法などにつき、編集委員間でメールで意見を交換しながら、ひとつひとつ決めていきました。

何分第1号ということで、まさしく「生みの苦しみ」を随所で感じるようになりました。作業を進めていくにつれ、細かい確認ポイントがいくつも出てきたのです。会員近況は、全員を載せるため字数を200字までと短くして、理事の方々を通して募集することとし、連絡が取れる会員に対して、10月初旬に執筆依頼を依頼文と共に委員長より理事の方々に発送しました。

当たり前のことですが、上記の編集委員間の連絡も、理事の方々への会員の近況依頼も、もちろんすべてメールで交信されました。青春をアナログ世代に育った我々からすると、昨今のデジタルコミュニケーションの世の中はまさに隔世の感があります。

私も24回から26回卒業の、連絡が取れる会員に依頼のメールを発信しました。11月末の原稿締切日まで、果たしてどれくらい原稿が集まるのか正直心配でしたが、本当にたくさんの方々から近況報告が届き、ほっと胸を撫で下ろしました。会員の方々からの原稿は、行数、字体、写真の添付などそれぞれ独自の形式を取っておられるので、それらを統一する校正の目的と、完成までのスケジュール再チェックのため、12月14日に第1回編集会議が開かれました。

やはり編集委員が実際に集まって話し合うと、メールではつい見落としとしてしまいそうなポイントも幾つか出てきて、会報の中身が徐々に具体的にイメージ

化してきました。西川先生は、全体の取りまとめ役として種々の細かい作業の指示・確認をしていただき、表紙デザイン・写真を谷さんが担当され、会報編集委員会規定と、今後の編集作業を容易にするために「会員の近況報告に関する投稿規定」を伊藤さんが、編集後記を私が担当しました。

その後西川先生より最終原稿を郵送していただき、細かい点も含め各編集委員で再度のチェックを経て、最終調整の目的で、2014年3月25日に第2回編集会議が開催されました。

最終原稿を手元に、編集会議では、形式面に重点を置き意見を交換しました。保存用として冊子の形で若干数印刷することを決め、西川先生より数社の印刷会社の見積りを取得いただき、理事会に請求する予算が決まりました。

ついに4月5日に最終原稿が完成し、西川先生より理事の方々に通知されました。予定より1ヶ月余り遅れたものの、第1号ということもあり、慎重に校正した過程で生じた遅れと、理事や会員の方々にもご納得いただけたと思います。4月17日に西川先生より、楠ヶ丘会に原稿ソフトを手渡され、22日に楠ヶ丘会のホームページに掲載されている旨理事の方々に通知がありました。

5月末には谷さんが、次号の「楠ヶ丘」に投稿する案内文を作成いただき、会報第1号発行に関する一連の作業が完了しました。

その後5月31日の理事会において、会報編集委員会から9項目の提案を提出し、会報編集委員会規定、「会員の近況報告」に関する投稿規定、依頼原稿に関する投稿規定、会報冊子の発行、第1号と2号の印刷費用の予算の5項目が承認されました。

改めて手元に届いた第1号の会報冊子に目を通すと、皆さまの近況、大学時代の思い出、卒業後のイスパニア語圏でのご活躍などが生き生きと伝わってきて、感慨深いものがありました。

投稿いただいた諸先生方並びに会員の方々、投稿依頼にご協力いただいた理事の方々、そして昨年の9月以降試行錯誤を繰り返しながらも、何とか完成にこぎつけることができた編集委員の方々のご協力に対して、心より感謝致します。この会報が末永く続くことにより、「イスパニア会」の益々の発展に少しでも役に立てることを願わずにはられません。

会員の近況報告

杉井 皓一 1966年（昭和41年）卒

昨年から家内とレールパスで欧州鉄道旅行を始めました。スーツケースだと



駅の乗り降りが大変なのでバックパックです。昨年はドイツを一周、今年はフランスを一周しました。フランスはスペイン語圏からの観光客が多いせいか、観光案内所に英語、スペイン語のガイドが居り、一部の列車内ではスペイン語でも案内放送をしていました。シャモニーでロープウェイとエレベーターで3,907Mのエギユユデユミディに登るとモンブラン（4,810M）は目の前で、いつまでも見飽きない景色に感動しました。

高橋 覚二 1967年（昭和42年）卒

平成22年3月定年と同時に再任用となりましたが、20年に脳梗塞を起こしたこともあって、25年3月に退職しました。今は名誉教授室に行って仕事をしたり、趣味のケーナやオカリナを習って楽しんだりしています。5歳の孫に、「じいじは面白い！お母さんの次に好き」と言われ、子育ての時には一度も出席できなかった運動会、生活発表会や祖父母会等、孫の行事に参加して、これまた、じいじライフを楽しんでいます。

荒川 弘道 1967年(昭和42年)卒

(株)クラレでは海外事業一筋。南米での合弁事業構想が頓挫した為、同地域への赴任は有りませんがロスアンジェルス、ニューヨーク、香港、ソウルで延べ10年間駐在。2年間のロス時代には中南米をロス管轄とするよう提案し毎月単身出張販売に出かけスペイン語を駆使して新規商売を拡大する。ブラジルを除く殆どの国々を訪問。各国でビールのつまみに食べた seviche de camarones の味が今でも忘れられません。後にも先にもこの2年間で私のスペイン語に関して最も輝いた時期でした。

足立 吉晟 1967年(昭和42年)卒

先日大阪で開かれた、第1回生と第2回生合同イスパニア語学科同窓会に出席し、懐かしい人々にお会い出来ましたが、一番若い人でも来年には70歳に届きます。夫々の人生の過半を過ぎても、元気に生きて活躍しておられるのを見て、神戸で生まれ、教育を受け、仕事を得、家庭を造り、ここで人生を閉じようとしている自分の人生は、果たして何か世の中に存在価値があったのか疑問に感じ始めています。後は子供たちに頼むしか無いようです。

藤田 浩二 1977年(昭和52年)卒

昭和52年(学26H)卒業の藤田浩二といいます。卒業後関東にある電気メーカーに就職し昨年無事定年を迎えました。現在は継続雇用制度により引き続き同一職場に勤務しています。お陰様で元気で過ごしております。近い将来スペイン語圏の国々に再び行ってみたいと希望しながら頑張っております。

岩坂 敬子(旧姓:芝田) 1984年(昭和59年)卒

卒業してちょうど30年の時が流れました。私は京都府精華町に在住、最近ご近所さんに誘われて国際交流クラブのお手伝いをする事になりましたが、それ以外はお気楽な専業主婦をしています。この夏(2014年7月)イスパニア学科の仲よしメンバーが集まりました。

誰だかわかりますか？



前列左より、岩坂敬子（旧姓芝田）、米田眞澄（安井）、中尾菜穂子（浜田）、
櫻本葉子（中島）、石田敦子（小坂）
後列左より、魚谷栄子（小野）、西原美由紀（清水）、三谷かおる（和田）、
武中靖子（福田）、奥出加奈子（八幡）

伊藤 卓郎 1986年（昭和61年）卒



サラリーマン生活の折り返し地点は越えましたが、2012年、2013年と神戸マラソンを4時間30分で完走しました。今年（2014年）は自己ベスト更新を目指して週末にスポーツジム通いを始め、ランニング以外にも昨今流行りの体幹トレにも励んで

きましたが、出場枠を超えての応募があり、抽選の結果、残念ながら落選。走りた

くても走ることができない「マラソン難民」となりました。しかし Keep Running の日々です。

(写真は 2013 年神戸マラソン 32km 付近、白シャツ/帽子に赤風船が筆者)

垣合 悦子 (旧姓：角野) 1995 年 (平成 7 年) 卒

一昨年、主人の転勤で大阪から広島県の福山市へ。秋から冬にかけては牡蠣祭



りや酒祭りが目白押しで、paraiso! です。卒業後、ブラジル日系社会で 2 年働き、スペイン語の兄弟のようなポルトガル語にも触れ、日系移民の方に大変お世話になりました。時を経て今、福山に住む日系ブラジル人・ペルー人等の生活のサポートに携わっています。当時の感謝の気持ちを思い出し、ラテンの風を懐かしみながら…。昔出会った色々な事が、思いがけずまた繋がってくるのが、不思議で面白いなあと感じています。

宮崎 貴子 (旧姓：遠山) 1996 年 (平成 8 年) 卒

オランダとドイツで 4 年間過ごし、昨夏帰国しました。現在は夫と小学 2 年生の娘との 3 人暮らし。この夏から 8 年ぶりに仕事を再開しました。近所の大学の研究室で秘書の仕事をしています。スペイン語からはすっかりかけ離れた生活を送っています。

土屋 寛子 1996年（平成8年）卒

在学中にトレドへ留学したのをきっかけにスペインとの付き合いが始まりました。卒業後はとにかくスペインへ行きたい一心で旅行会社に就職、かれこれ15年以上のマドリード生活です。日本とスペインを結ぶ架け橋になるべく、ブログ「スペインの扉」も開設しました。スペイン情報誌「ACUEDUCTO」にコラムの連載も始めています。スペインでのコーディネート、通訳、など、hirokokotsuchiya165@gmail.comでご相談受け付けております。

村岡 荘子(旧姓：岩木) 1996年（平成8年）卒

こんにちは。現在は懐かしの(?)神戸市営地下鉄沿線、西神中央在住で小学生と幼稚園児3人の母親をしています。当時のクラスメートとは今もちょこちょこ会って仲良くさせてもらっています。いつの日かみんなで熟年スペイン旅行をしたいねって話しています。友達は外大で得た一番の財産です。世界が広がりました。

土屋 亮 2001年（平成13年）卒／2003年（平成15年）修士課程修了

室蘭から神戸に出て、学士、修士、博士（博士課程は退学）と9年間外大に通った後、職を得た姫路の勤務先に5年ほど明石から通うかたわら、大阪や京都でも非常勤講師として教壇に立ちました。2011年4月からは現在も勤務している福岡大学で第二外国語としてのスペイン語を教えています。学生時代に住んでいた板宿・須磨から明石にかけてのエリアが大変懐かしく、関西に所用がある際に立ち寄っています。

青木 茜 2013年（平成25年）卒

私は現在、大阪大学で職員として働いています。職員として関わる大学は、学生時代とは全く違う顔をしていて、毎日が本当に楽しいです。私が外大を大好きになったように、阪大を大好きと思ってもらえるよう、学生さんや先生方をしっかりサポートしていきたいです。

阪大には外国語学部があるので、いつか外大と一緒に何かお仕事をし、外大に恩返しができるのであれば本当に嬉しいです。

岩田 周午 2014年（平成26年）卒

24歳で初めて『ライ麦畑でつかまえて』を読んだ。16歳の世間への苛立ちや疎外感が、自分の精神構造と大差ないことに何だかほっとした。まだ16でいようと思った。

4月から住み始めた場所は、まるで違う常識と文化がある。早々に結婚し、家と車と大型犬を持つのが最良の人生だそう。日本にいるはずが、また海外留学でもしている気分になる。

20代は30代の前夜祭だ、と親友と誓い合った。『ヴォーグ』の編集長が「20代のうちはイタイファッションでもいいからとにかく色々試してみる。それが30代の肥やしになる。」と言っていた。その通りだと思う。あまり先のことは考えないでおこう。

姜 先喜 2014年（平成26年）卒

関西国際空港のサービス部門を運営する会社に就職し、現在は免税店舗に配属されています。先日はパスポートを紛失し泣いているスペイン人セニョーラに遭遇し、一緒に空港中を探しました。私の業務とは全く関係ないものの、上司からは「スペイン語を喋っているときのほうが良い笑顔しているね」とのコメントをもらいました。また配属店舗の商品はフランス製が多いのですが、スペイン語表記もあり大学では学ばなかったような美容単語を学習する日々です。

大倉 みどり 2014年（平成26年）卒

ペルー、クスコの旅行会社に勤務しています。大学4年次に休学をし、クスコでボランティアをしていた際に出会ったのが現在の社長です。主に個人旅行を取り扱っており、お客様と直接メールのやり取りをしながら、旅のコーディネートをさせてもらっています。社員4人の小さな会社ですが、アットホームでとても働きやすい環境です。外大で学んだスペイン語を生かし、恵まれた環境でお仕事をさせてもらえることを、とても幸せに思います。ご旅行などでペルーに来られる方がいましたら、ぜひご連絡ください。

ナオツアー-tavivitom@gmail.com

神戸外大イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2014年05月31日暫定

会 長	西川 喬	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
副会長	谷 善三	(16回)	昭和42年(1967年)卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年(1966年)卒業
	坂根 博	(21回)	昭和47年(1972年)卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年(1977年)卒業
	冨尾 圭子	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年(1981年)卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年(1992年)卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年(1998年)卒業

理 事

	池沢 英一	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
	増野 俊則	(22回)	昭和48年(1973年)卒業
	和久田 好男	(23回)	昭和49年(1974年)卒業
	田岡 敬造	(25回)	昭和51年(1976年)卒業
	松久 恵美子	(31回)	昭和57年(1982年)卒業
	塩川 雅美	(32回)	昭和58年(1983年)卒業
	石田 敦子	(33回)	昭和59年(1984年)卒業
	吉田 葉子	(42回)	平成 5年(1993年)卒業
	吉田 昌洪	(43回)	平成 6年(1994年)卒業
	伊藤 かお里	(44回)	平成 7年(1995年)卒業
	中川 智子	(50回)	平成13年(2001年)卒業
	岡部 祥子	(51回)	平成14年(2002年)卒業
	長谷川くにこ	(52回)	平成15年(2003年)卒業
	森田 智香子	(53回)	平成16年(2004年)卒業

	濱田 香里	(54回)	平成17年(2005年)卒業
	赤澤 理絵	(56回)	平成19年(2007年)卒業
監 事	松田 侑子	(53回)	平成16年(2004年)卒業
	森川 香織	(53回)	平成16年(2004年)卒業

「会員の近況報告」に関する投稿規定

2015年3月

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. 文字サイズは12、字体はMS明朝体とする。ただし、この字体がなければ、他の字体でもかまわない。
4. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
5. 写真を提供することができる。ただし、本人が写っているもので、1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
6. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

編集後記

昨年、会報1号がようやく完成し、それから半年ほどで第2号の作成が始まりました。第1号での基盤があったものの、第2号でも同様のものが出来上がるかと少し心配していましたが、集まった原稿を読むと、今の学生の生の声を聴けたり、先生方の学生時代の話、鼓先生の叙勲、そして、イスパニア語圏とはまた違った生の香港の話など、多岐にわたりました。様々な年代の方に楽しんで読んでいただけるものになったように思います。

今回原稿をお寄せ下さった多くの方々には、深く感謝いたします。

また、次号からも皆様の近況をお知らせいただき、同窓生の交流を深められたらと思います。

会報編集委員

西川 喬

谷 善三

田岡 敬造

伊藤 かお里（記）

イスパニア会 会報 第2号

神戸市外国語大学イスパニア学科
イスパニア会

イスパニア会会報 第2号
2015年3月31日 発行
発行者 会長 西川 喬
発行所 インダ印刷株式会社
